

2020/07/19

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑦

『神が来られた目的』 ヨハネ 3:1-21

■ イエス・キリストとニコデモの会話

「さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ 3:1-39)

「神の国」とは神が支配する永遠の国、一般的には「天国」のことです。「人は、新しく生まれなければ神の国を見ることはできない」ということは、私たちは生まれながらには神の国を見ることはできないということです。それは、救われる前の私たちは、神の目から見ると死んだ状態にあるからです。死んだ者が天国に行くためには、新しく生まれなければならないのです。

「ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」(ヨハネ 3:4-6)

「水」とは、水のバプテスマを指します。ヨハネは、悔い改めてバプテスマを受けるようにと人々に説きました。悔い改めるとは、神に立ち返るということです。すなわち、ここで「水」と言われているのは、神の呼びかけに応答することを表します。

また、「御霊」は、神のいのちを象徴する一つの表現で、「御霊を受ける」とは永遠のいのちを受けるということです。これは、「霊のからだ」を受けるとしてもあります。神の国に入るには、肉の体ではなく霊のからだを必要とするからです。

つまり、神の国に入るには、神の呼びかけに応答して、霊のからだを着せられなければなりません。これが、新しく生まれ変わるということであり、「救い」です。

「あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っただけではありません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」(ヨハネ 3:7-8)

神の救いは、どこから来てどうなっているのか、私たちにはわかりません。神の呼びかけに応答すれば救われるのですが、それは、潜在意識の中で行われることだからです。私たちが意識できる顕在意識では、霊の世界を見聞きすることはできません。人はまず潜在意識において神が呼び掛ける声を聞き、応答して救われ、それが顕在意識にも伝わって教会に行く思いにつながり、この方こそ真の神であるという告白に導かれます。

つまり、信仰を告白することで救われるのではなく、救われたから信仰を自覚して告白に至るのです。もし、告白が救いの条件ならば、十字架以前の人々はどうなるのか、一度も福音を聞くことがなく死んでいった人々はどうなるのかという疑問が生じます。しかし、救いは潜在意識の中で起こるものですから、すべての人に平等にチャンスがあるのです。

ですから、信仰を告白していない人が救われていないとは限りません。キリスト教は伝統的に「イエス・キリストを信じる信仰によって救われる」とされてきましたが、この表現は正確ではありませんでした。「イエス・キリストを信じる信仰によって」ではなく、「イエス・キリストのあがないによって救われる」のです。最新の新共同訳聖書ではそのように改められています。

誰が救われていて、誰が救われてないか、私たちにはわかりません。神が人を救うのです。救いは神のなさることですから、私たちが心配することではなく、それはゆだねるべきものです。私たちができることは、神が救った人に御言葉を伝え、救いが自覚できるようにすることです。すなわち、収穫です。

「ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。」

(ヨハネ 3:9-12)

イエス様は、ここでニコデモへの説明を終わらせています。ニコデモは理性の人でした。しかし、理性では真理に到達できません。理性で知ることができるのは、この世界の出来事だけです。時間や空間に支配されない神の国を理解できるのは、信仰なのです。では、理性は必要ないのかというとそうではありません。理性は、信仰の助けに使うためのものです。理性を主にしようとするから、理解できなくなってしまうのです。イエス様は、理性で理解しようとしてもわからないからと、話を終わりました。

■天から下ってきた人の子

「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」(ヨハネ 3:13)

イエス様は、ご自分に対して「人の子」という言葉を好んで使われました。「人の子」の「人」はギリシャ語で言うと、「アントゥローポス」という語ですが、この語だけで、イエス様を指して使われる場合があります。たとえば、次のような場面で使われています。

「イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」(ヨハネ 2:25)

ここの「人」は、イエス様ご自身のことを指します。つまり、ここは、「イエス様は、ご自分のうちにあるものを知っておられたので、ご自分についてだれの証言も必要としなかった」という意味です。イエス様はご自分がメシヤだということを知っていたので、誰からも証言してもらう必要はなかったということです。では、なぜイエス様は、人の子という表現を使ったのでしょうか。

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」
(ヨハネ 3:14-15)

「モーセが荒野で上げた蛇」とは、神がモーセに作らせた青銅の蛇のことで、蛇にかまれた時にモーセが掲げた青銅の蛇を見上げた人は生きることができました。これは、復活のキリストのひな形です。天から下ってきた人の子は、悪魔を滅ぼして復活し、また天に上げられ、永遠の国を実現します。その人の子を見上げる者は生きるのです。

これはダニエル書の預言の成就です。旧約聖書や黙示録の預言を読み解くには、まずは大枠からつかむことが必要です。最初から詳細を読み取ろうとすると混乱してしまいます。聖書の預言はどれも一つの決まったストーリーがあって、それは「神が来て、悪いやつをやっつけて、神の国が樹立する」というものです。

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」
(ダニエル 7:13-14)

この「人の子」は私であると示すため、イエス様はご自分を「人の子」と呼びました。こ

ここに記されている国こそ、イエス様が言われた神の国です。

「彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手によだねられる。しかし、さばきが行われ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」(ダニエル 7:25-27)

「彼」とは、悪魔のことです。つまり、これは、「メシヤは悪魔によって苦難に会うが、逆に悪魔を滅ぼし、神の国を実現する」という啓示です。「ひと時とふた時と半時」とは「3年半」のことですが、イエス様が宣教活動をしていた期間と合致する点も興味深いところです。イエス様は、この啓示の通り来られたため、ご自分を「人の子」と呼び、天にあげられなければならないと言われたのです。

■イエス様がさばくのは誰か

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

(ヨハネ 3:14-15)

「信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つため」という節を、忠実に翻訳すると、「信じている者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持ち続けるために」となります。いったいどういう意味なのでしょう。

そもそも私たちの世界に死が入り込んだのは、悪魔の仕業です。もともと神が造ったエデンの園は永遠の神の国でした。そこに悪魔が来て、アダムとエバをだまし、罪を犯させて、神と人を分離させました。これが死です。

ということは、もし悪魔が放置されていたら、私たちが再び神の国に入っても同じことが繰り返される可能性があるということです。ですから、私たちが永遠のいのちを持ち続けるためには、悪魔を滅ぼす必要があるのです。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

(創世記 3:15)

これが、神が語られた最初の預言です。悪魔とイエス様の間に敵意が置かれ、イエス様は悪魔を滅ぼすことが書かれています。「悪魔は彼のかかとかみつく」とは、十字架のことで

す。

人間と神を分離させたのは悪魔の仕業です。その死の力を持つ悪魔を滅ぼすためにイエス様は来られたのです。そうしないと、私たちが永遠のいのちを手にしても、アダムとエバと同じことが繰り返され、また永遠のいのちを失ってしまう危険があるのです。

イエス様は、いよいよその時が来たと言っておられます。ここから大変すばらしい福音が見えてきます。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」(ヨハネ 3:16-18)

ここも、原文は現在形です。イエス様が世に来られたのは、「信じている者が滅びることなく、永遠のいのちを持ち続けるため」、すなわち、アダムとエバに起きたようなことが2度と起こらないためです。つまり、神がこの地上に来た目的は、死んでいる者をさばくためではなく、助けるためです。悪魔の仕業によってさばかれた状態にあり、死んだ世界にいる私たちを助けるために、悪魔の仕業を滅ぼすため、神は来られたのです。

ヨハネは、彼の書いた手紙の中で、次のように説明しています。

「罪のうちに歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」(Iヨハネ 3:8)

罪は悪魔から出たものであり、この悪魔の仕業を打ち壊すためにイエス様は来られました。それは、私たちが「永遠のいのちを持ち続けるため」です。

悪魔の起源については、「初めから罪を犯していた」としかわかりません。しかし、無から生まれた宇宙の始まりがはっきりと説明できないように、悪魔の起源について理性ではわかりません。わからないことを追究して、勝手な想像がふくらみ、理性が暴走を始め、根拠のない話を暴走させてはいけません。たとえば、キリスト教の教理の中でも「悪魔は天使が墮落したものである」という説を支持する人が多くいますが、聖書はそうは言っていません。聖書が教えているのは、「初めに神がおられた」ということです。それ以上のことはわからないのですから、わかろうとしなくてもよいのです。聖書が教えていないことを語るべきではありません。

大切なことは、起源を知ることではなく、今の私たちの問題を知り、解決を図ることです。それは信仰です。悪魔は滅ぼされ、信じることで神の国に行けると信じる信仰が大切なのです。悪魔は十字架で滅ぼされましたが、悪魔が作った死の世界は今も続いているため、私たちの死との戦いは継続しています。ただし、悪魔は滅ぼされているので、イエスの御名によって悪霊を追い出すことはしません。今は信仰によって勝利することが教えられています。

イエス様が十字架で勝利し、私たちは今神の国のただ中であることを信じるのです。見えるところは変わらないため、理性はまだ何も変わっていないと言いますが、イエス様はそれを成就してくださったと信じる信仰が大切なのです。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」（ヘブル 2:14-15）

人は、神がいなければ生きられず、ものを考えることもできません。その神との関係を壊し、神を認識できなくさせたのは死です。ですから、神は、死をもたらした悪魔を滅ぼすのです。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」

（ヨハネ 16:8-11）

神は決して人をさばきません。死人をさばいても何も変わりません。死人が変わるのは、生かされたときです。さばきとは、人ではなく悪魔がさばかれることです。

「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」（ヨハネ 3:19-21）

信じなかった人は、すでにさばかれています。その中で信じる人は光のほうに来るのです。信じることができるのは、神が救ってくださったからであり、このことはやがて明らかにされます。あなたが最後の日を迎えた時、人の行いで人は救われることはない、すべて神が導いてくれたのだとわかるようになるのです。

神がこの地上に来たのはさばくためではありません。神は私たちがいやすため、救うために来られました。イエス様が悪魔を滅ぼされたことによって、私たちは永遠のいのちを失うことがなくなったのです。